スピリチュアリティ文化のいま（上）

伊藤 雅之

宗教とは区別

心の平和 希求する潮流

二〇〇〇年代以降、ヨーガ、マインドフルネス（瞑想）など「ウェルビーイング（持続的幸福）」を強調する文化的潮流が世界的に発展している。それらは宗教のみならず、医療、看護、教育、スポーツ、ビジネスなど多様な分野に広がってきている。心とからだのつながり、ありのままの自己受容、自然との調和などを通じて、からだの健康だけでなく心の平和を現代人は希求しているのである。こうしたグローバルに展開する現代スピリチュアリティ文化について、その特徴と過去六十年間の歴史的変遷を概観しよう。

この文化的潮流のきっかけは、一九六〇年代後半以降、北アメリカや西ヨーロッパなどの人びとの間で、「宗教」を補完したり、代替したりするものとしての「スピリチュアリティ」への関心が高まったことである。その典型的な担い手は、自らを「スピリチュアルであるが、宗教的でない（Spiritual but not Religious、SBNR）」と自己規定する人びとである。SBNRと呼ばれる人びとの割合はアメリカにおいてとくに大きい。二〇一七年に実施された世論調査によれば、アメリカ人の27%、実に四人に一人がこの枠組みに入るとされている。

日本においては、二〇一八年に実施された宗教をテーマとする世論調査において、「宗教は信仰しないが、聖なるものや霊的なものには関心がある」と回答した人が22・5%であった。この人たちは、SBNRに近い意識をもっていると考えられる。日本において、「スピリチュアリティ」という語は欧米ほど定着しているわけではない。しかし、「聖なるものや霊的なもの」に該当するのがまさにスピリチュアリティと言えるだろう。

世界の諸宗教の形態は歴史的に見ればきわめて多様であり、スピリチュアリティは宗教のなかに内包される、あるいは同義語であると長らく考えられてきた。しかし二十世紀後半になると、一定の割合の人びとがこれら二つの概念を明確に区分し、一方の宗教は諸制度や教義や儀礼という形式上はっきりと組織だっているものを指し、他方のスピリチュアリティは個々人による通常の自己を超えた何ものかとのつながりの経験を表すようになってきている。

現代スピリチュアリティ文化は、時代ごとでその内容も社会的位置づけも大きく変化してきている。一九六〇年代後半から七〇年代半ばの時期は、対抗文化（カウンターカルチャー）のなかでの意識変容の試みとして特徴づけられる。対抗文化とは、現状の社会体制や価値・規範に異議申し立てする社会・文化運動のことである。第二次世界大戦後に生まれたベビーブーマー世代が担い手となって展開したこの運動のなかに、スピリチュアリティ文化の源泉を見出すことができる。たとえば、親世代が信仰したキリスト教への抵抗のなかで、欧米の若者たちはヒンドゥー教や仏教など東洋思想の影響を受けて、ヨーガや禅、瞑想の実践をした。こうした実践者たちが意識変容を試みる文化が発達した背景には、科学的テクノロジーを重視し自然との共存を軽視した西洋物質文明への批判があり、また人間の心とからだを分離したものとして捉える心身二元論への懐疑がある。

一九七〇年代後半から九〇年代半ばになると、次第に社会や意識を変革しようとする急進的な傾向が薄れ、私的空間での「自分探し」という下位文化（サブカルチャー）に移行していく。「ニューエイジ」（日本では「精神世界」）がスピリチュアリティ文化にかかわる思想・実践の総称に使われ、書籍のカテゴリーになるのはこの時期からである。ヒーリング、ヨーガ、瞑想、呼吸法、風水、タロット、生まれ変わりといった多様なテーマがこの分野に含まれる。ニューエイジは欧米諸国や東アジアに多数の支持者を広げていく。しかし、この時期のスピリチュアリティ文化はあくまで正統派の科学では認められない疑似科学的な特徴をもつ。一般社会からは否定的なイメージが強かったのである。

次回は、現代スピリチュアリティ文化が主流文化（メインカルチャー）に浸透していく二十一世紀以降の展開を見ていくことにしたい。

（次回は二月一日掲載）

いとう・まさゆき　愛知学院大文学部宗教文化学科教授。1964年、名古屋市生まれ。98年、ペンシルバニア大大学院社会学部博士課程修了（Ph.D.）。専門は宗教社会学。主な著書に『現代スピリチュアリティ文化論―ヨーガ、マインドフルネスからポジティブ心理学まで』（明石書店）『現代社会とスピリチュアリティ』（渓水社、2003年）など。